

特別支援学校における「生涯スポーツ」をめざす授業の実践
：バスケットボールの単元に着目して

橋本和也・木山慶子・山崎隆史・岡田明子

群馬大学教育実践研究 別刷

第39号 57～64頁 2022

群馬大学共同教育学部 附属教育実践センター

特別支援学校における「生涯スポーツ」をめざす授業の実践 ：バスケットボールの単元に着目して

橋本和也¹⁾・木山慶子^{1) 2)}・山崎隆史¹⁾・岡田明子¹⁾

1) 群馬大学共同教育学部附属特別支援学校

2) 群馬大学共同教育学部保健体育講座

Practice of classes to realize lifelong sports in Special Needs School ：With The Goal-type Basketball classes

Kazuya HASHIMOTO¹⁾, Keiko KIYAMA^{1) 2)}, Takashi YAMAZAKI¹⁾, Akiko OKADA¹⁾

1) Gunma University, Special Needs School Attached to Faculty of Education

2) Gunma University, Cooperative Faculty of Education, Health and Physical Education

キーワード：特別支援学校，体育授業，生涯スポーツ，バスケットボール

Keywords: Special Needs School, Physical education classes, lifelong sports, basketball

(2021年10月24日受理)

1 はじめに

特別支援学校高等部学習指導要領（文部科学省，2017）¹⁾ 総則において，学校における体育・健康に関する指導を，生徒の発達の段階を考慮して学校の教育活動全体を通じて適切に行うことにより「健康で安全な生活と豊かなスポーツライフの実現を目指した教育の充実に努めること」が明記された。さらに，保健体育の目標は，体育や保健の見方・考え方を働かせ，課題を発見し，合理的・計画的な解決に向けた主体的・協働的な学習過程を通して，心と体を一体として捉え，生涯にわたって心身の健康を保持増進し，豊かなスポーツライフを継続するための資質・能力を次のとおり育成することを目指す¹⁾，である。その資質・能力は，（1）知識及び技能，（2）思考力，判断力，表現力等，（3）学びに向かう力，人間性等，の3つとなった。生涯スポーツに向け，3つの資質・能力を生徒に身に付けさせることが体育の授業の重要な役割であることを改めて認識しなければならない。

しかしながら，東海林ら（2021）²⁾ は，特別支援学級での体育的活動を対象とした調査・研究は乏しいと述べている。水本ら（2020）³⁾ は，特別支援学校の体育の課題について，教員の意識としてチーム種目が実施しにくい，指導方法がわからない，などがあると報告している。須田ら（2015）⁴⁾ は，特別支援学校の教員の体育授業に対する困難さを調査し，体育免許を持たない教員が体育の授業を担当する不安，子どもの実態把握（つまづき，技術を向上させる）や単元の指導・知識に関する困難を感じている教員が多かったことを報告している。

一方で，特別支援学校における体育の授業の実践には，福永ら（2019）⁵⁾ が豊かなスポーツライフの実現をめざす授業として，高等部の生徒を対象にバスケットボールの単元を実施している。①チーム編成とチームの固定化，②タブレットの活用，③視覚的な支援，の3つの工夫をすることによって，体育好き，バスケットボールが楽しいと感じる生徒が増えたが，評価方法や地域資源の活用に課題が残ったことを報告

している。清野ら (2016)⁶⁾ は、「運動の楽しさ」を基調とした「走・跳の運動遊び」を小学部の児童を対象に実践している。1年生児童の発達段階や実態を加味し、やさしい運動に取り組むことで、楽しさを体感させる、加えて、設定課題を極端に変えることなく同じ課題での反復を経験させることで、「できた!」「やった!」の達成感、「先生に褒められた!」の承認が得られたと報告している。高橋ら (2017)⁷⁾ は、体育の授業において苦手意識が高く敬遠されがちな「動きを持続するための運動(小学校)」「持久走(中学校)」の授業改善をめざし、児童・生徒同士が働きかけを行いながら、自分のペースで活動を展開し、運動への意欲を持ち、楽しく取り組める教育方法を提案している。また、知識・技能における「技能」習得としては、松坂 (2017)⁸⁾ が中学部でのサッカーの授業において、個人技能の改善について検討している。サッカーの個人技能評価課題とそれらがどの程度できているかの評価を授業前後で比較し、授業によって技能の向上の兆候が見られたと報告している。小山ら (2020)⁹⁾ は、発達障害の子どもは、投げるなどのボール操作運動が未熟で苦手な傾向があり、中でもボールを上手く握れない、ボールへ力を伝えられない、握力や筋力が弱くしっかりと握れないことで身体を大きく連動して使えないという傾向がみられたとし、少し変わった楕円形ボールを用い学習環境を工夫することで発達障害児の投げる運動に上達がみられたと報告している。

これらのことから、特別支援学校における体育の授業には困難を感じている教員が少なくないことが推察される。そのことを踏まえ、子どもたちの技能を含む資質・能力を適切に育成しながら、豊かなスポーツライフをめざす体育の授業を実践するためには、特別な支援を必要とした子どもたちが多様であることを考慮し、より多くの実践を積み重ねることが重要であると考える。

そこで、本研究では、①生徒の個々の実態を捉え、「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」の3つの観点を踏まえた目標設定と評価をする。②生涯スポーツをめざした保健体育科「体育の見方・考え方」を単元の指導計画に位置付け、学習活動を設定する。

以上の2点に着目し、授業実践及び評価を行うこと

を目的とした。

2 実践の方法

2.1 対象および期間

対象者は、G大学附属特別支援学校高等部1年生3名、3年生3名の計6名(男子5名、女子1名)である。知的障害を主な診断とし、自閉症、自閉的傾向、ダウン症候群、代謝異常等がある。教員の学習者に対する実態の評価としては、対象生徒には運動好きが多い、である。

授業実践期間は、2020年10月～11月の計24時間であった。なお、体育の授業については、毎週の月曜及び水曜が25分、火曜及び木曜が50分、の4回が設定されている。

2.2 授業の概要

1) 単元の目標について

単元は、友だちと得点をとる楽しさや喜びを味わうことをとおして、スポーツをする楽しさや面白さを感じ、余暇や生涯スポーツへとつなげることを目指し、球技領域「つなげてねらおうバスケットボール」とした。

対象校において作成している「保健体育科、球技領域の実態調査表」を基に、生徒がこれまでの学習の中で、どのような技能を身に付け、できるようになってきているかを詳細に確認した。また、課題となっていることや身に付けさせたい事柄についても適切に把握した。

ここでは、1年生のAさんを一例として取り上げる。Aさんの3つの資質・能力についての実態は表1のとおりである。

表1 Aさんの実態

【知識・技能】に関する様子	止まったままの状態ならボールを捕ることができるが、走りながら捕ることは難しい。
【思考・判断・表現】に関する様子	(サッカーの授業の中で)「走りながらドリブルしよう」「相手をよく見よう」と、友だちと声をかけ合って練習していた。
【主体的に学習に取り組む態度】に関する様子	(サッカーの授業の中で)「速くドリブルをしたり、ボールをやさしく渡したりしたい」と勝つための工夫や、友だちと協力してプレーする工夫を思いついて、積極的に発言していた。

表2 単元の指導計画

	○主な学習活動 ●指導上の留意点	〈想定する姿・観点〉
第1次 (全6時間)	<p>○ボールサーキットをして、バスケットボールの試合に必要なドリブル、パス、キャッチ、守備、シュートの動きに取り組む。</p> <p>●サーキットの中でシュートして得た点数をチームで競う形式とする。</p> <p>●各チームは、A、C、Nが緑色のゼッケン、D、L、Oが赤色のゼッケンを着用する。また、シュートがゴールに入ったら、自分で得点板の数字を変え、1ゴールにつき5点入ることを捉えられるようにする。</p>	<p>・高さに応じて投げ方や力加減を変え、ゴールにシュートしたり、ボードに当てたりしている。(知識・技能)</p> <p>・落下点を予想し、動いたり、ジャンプしたりしてボールをキャッチしている。(知識・技能)</p> <p>・友だちの動きを見て同じようにドリブルやシュートをしようとしている。(主体的に学習に取り組む態度)</p>
第2次 (全12時間)	<p>○3つのゲームをおこなう。(全12時間)</p> <p>(1)パス&シュート(ドリブル・パスの練習) (3)エリア分けゲーム (2)アウトナンバーゲーム(攻守の練習)</p> <p>●教師が手本を示してゲームの進め方を説明する。また、動画を撮影し、動きを振り返ることができるようにする。その際には、どのように動きを変えれば良いかポイントを絞って動画を提示し、問いかける。</p> <p>●床に印を付け、味方の位置や状況に応じて、自分から移動してボールを受けることができるようにする。</p>	<p>・味方の状況に合わせて、自分の動く方向やパスの出し方を変えている。(思考・判断・表現)</p> <p>・ボールを保持している相手につき、ゴールに向かう動きを防いだり、正面に立ってパスを出させないようにしたりしている。(知識・技能)</p> <p>・パスをもらうために、味方を名前で呼んだり、手を上げて居場所を知らせたりしている。(主体的に学習に取り組む態度)</p>
第3次 (全6時間)	<p>○試合を行ったり、チーム内でパスをどうつなぐか、得点をどのようにとるかを話し合ったりする。</p> <p>●作戦盤を用いて、話し合ったことを書いたり、撮影した動画のポイントとなる場面を提示したりして、友だちと作戦を立てられるようにする。</p>	<p>・味方のパスを受け取るために、もらう位置やもらい方の意見を出し合って練習したり、パスとシュートで投げ方を変えたりしている。(思考・判断・表現)</p> <p>・得点を取るために、チームの友だちとパスの練習をしたり、試合の中で、話し合ったことを実践したりしようとしている。(主体的に学習に取り組む態度)</p>

このようなAさんの様子から、本単元における指導事項を中学部2段階の内容¹⁰⁾を参考にして取り扱うこととした。また、日常生活においてゲームで友だちに勝つために作戦を練る姿や、「体力向上と健康のため、運動に親しんでほしい」といった家庭とのやりとりも踏まえ、Aさんの単元の目標を「味方や守備の位置、ゴールとの距離などを把握し、必要に応じて立ち位置を変えたり、走りながらパスをもらったりしながら、積極的にパスやシュートをすることができる」とした。

他の生徒についても同様に、「知識・技能」「思考・判断・表現」に関する実態を授業の様子や実態調査表を基に確認し、これまでの授業や他の教科授業の様子などから、「主体的に学習に取り組む態度」についても見取り、3つの観点を踏まえた単元の目標を設定した。

2) 本単元の「体育の見方・考え方」

生徒が、楽しさや喜びを感じながら運動に取り組むことができるように、本単元において働かせたい見方・考え方を「味方の状況を見てパスをしたり、パス

を受ける動きをしたりしてボールをつなげ、チームで得点をとる楽しさや喜びを味わいながらゲームをすること」と設定した。

3) 単元の指導計画

2) の見方・考え方を働かせながら学ぶことができるように、単元の指導計画を表2のように作成した。

3 実践の結果と振り返り

1) 第一次(1時～6時)

①主な活動

ドリブルやパス、キャッチ、守備、シュートの動きを取り入れたサーキットを設定した。

サーキットは、立ち位置の目印となる丸印のリングを置き、動く方向や位置の目安を視覚化した。教師は、動きの手本となるよう活動しながらサーキットを一緒に行いドリブルゾーンからスタートして、パス、シュート、キャッチ、守備、レイアップシュートの順番で1周できるようにした。

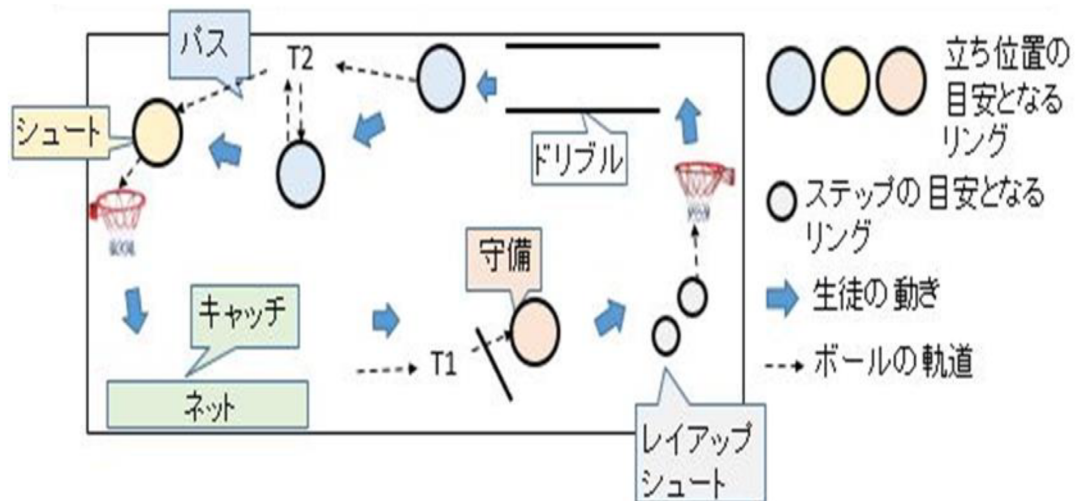


図1 場の設定（第一次）

②教師が重視したこと

以下の2点であった。

- ・基本的なボール操作の仕方を身に付けること。
- ・友だちや教師とボールをパスし合ったり、シュートをしたりする楽しさを味わうこと。

③指導上の留意点及び支援

以下の2点であった。

- ・サーキットを一緒に行い、動きの手本となるように示範する。
- ・立ち位置の目印となるリング（丸い印）を置く。

④場の設定

図1の通りとした。

⑤生徒の変容と振り返り

第一次の生徒の姿として、当初は、一つ一つの動きがぎこちなく、ボールの扱いもおぼつかない様子があったが、徐々に、ボールをしっかりとキャッチしたり教師の姿を確かめてからパスしたりするなど、一つ一つの動きに積極的に取り組む生徒の姿が見られるようになっていった。

また、想定する姿であった「高さに応じて投げ方や力加減を変え、ゴールにシュートする」や「落下点を予想し、動いたり、ジャンプしたりしてボールをキャッチする」ことができるようになってきた。

こうした姿を引き出すことができたのは、ドリブルやパス、キャッチ、守備、シュートの動きを取り入れたサーキットを設定したことで、どこでどのような動きを行い、技能を扱うとよいかが生徒にとって明確になったからではないかと考察した。これまでの体育科

の学習において、サーキット型の運動をしてきた経験が土台になっていたと考える。また、サーキット型にすることで、バスケットボールに必要な要素である、一つ一つの動きに着目しやすくなったこと、そして一つの動きや技能に傾倒せず、一連の流れで取り組む仕掛けになっていたことも関心や意欲を保つことにつながっていたのだと考察した。

一方で、高い位置にボールを投げることや一連の流れでシュートをすることが難しい様子が見られた。

このことから次時に向けて、個々の技能に応じた動きを取り入れるようにサーキットを改善することとした。また、パスをする良さや、チームで得点を得る喜びを感じることができるよう、チームでパスをつなげる等のチームプレーの要素を取り入れた動きを行う機会も設けることとした。

2) 第二次前半（7時～12時）

①主な活動

活動1：パス&シュート（チームでパスをつないでシュートする）

図2のように、コーンとバーでエリアを区切り、チームごとに1番の人が2番の人へパスをつなぎ、3番の人がシュートするパス&シュートを行った。エリアの位置は矢印のようにローテーションして、全員がパスやシュートに取り組むことができるようにした。

活動2：アウトナンバーゲーム（守備の数を減らして行うゲーム）

教師が守備を行い、守備に取られないようにパスを

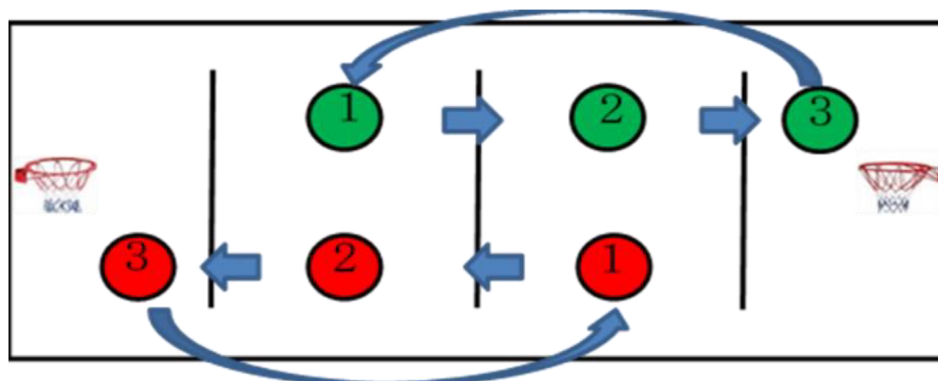


図2 場の設定 (第二次前半)

つなげたり、シュートをしたりした。ボールが誰のエリアにあるのかわかりやすいように、エリアをコーンとバーで区切るようにした。

②教師が重視したこと

以下の2点であった。

- ・ルールを知り、パスをつないで得点をとること。
- ・友だちと協力して得点を得る喜びを知ること。

③指導上の留意点及び支援

以下の2点であった。

- ・エリアをコーンとバーで区切る。
- ・腕を伸ばす動きを準備体操に取り入れ、高い位置にボールを投げる動きを捉えられるようにする。

④場の設定

図2の通りとした。

⑤生徒の変容と振り返り

第二次前半の生徒の姿として、エリアの区切りと次に誰にパスをするかというルールを捉え、エリアが変わっても、ゴールに体を向けてシュートしたり味方にパスをしたりすることができるようになった。すなわち、想定する姿であった「味方の状況に合わせて、自分の動く方向やパスの出し方を変える」ことができるようになってきた。これは、「エリア」という制限を設けたことで、役割や順番を捉えやすくなったことが要因として考えられる。また、サーキットとは異なり、友だちとパスをし合うことの楽しさを感じることもできたのではないかと考察した。

一方で、正面に守備がいる際にも、パスを出したり、その場でパスを受け取ろうとしたりする姿も見られた。また、投げたボールがゴールの高さに届かない生徒もいた。

これらのことから次時に向けて、第一次に行った

サーキットの動きを振り返るなど、生徒の動きとその場面に応じて活用することで、パスを出すためにドリブルをしたり、パスを受け取るために動いたりすることができると思った。また、ボールがゴールに当たったり、入ったりする経験をたくさん積むことで、ボールの投げ方を工夫する姿が期待できると考えた。

3) 第二次後半 (13時～18時)

①主な活動

エリア分けゲームを設定した。攻守のあるゲームとし、エリアに分けたコートでチーム練習をしたり、試合をしたりした。

②教師が重視したこと

攻守を繰り返す中で、パスをつなぐために友だちの動きを見たり、工夫して動いたりすること。

③指導上の留意点及び支援

以下の3点であった。

- ・エリアに分けたコートと生徒のポジションをボードで示す。
- ・低い高さのゴールを設置する。
- ・リングやテープで立ち位置の目印を示す。
- ・生徒の動きを見取り、必要な場面に応じて、サーキットで行った動きを振り返る。

④場の設定

図3の通りとした。

⑤生徒の変容と振り返り

エリアやルールが変わったが、生徒はこれまでの学習活動での経験を生かし、ゴールのあるエリアにいる生徒は、味方からのパスを受けて、体をゴールに向けてシュートする姿が見られた。また、想定する姿であった「パスをもらうためにかけ声をかけたり、ボー

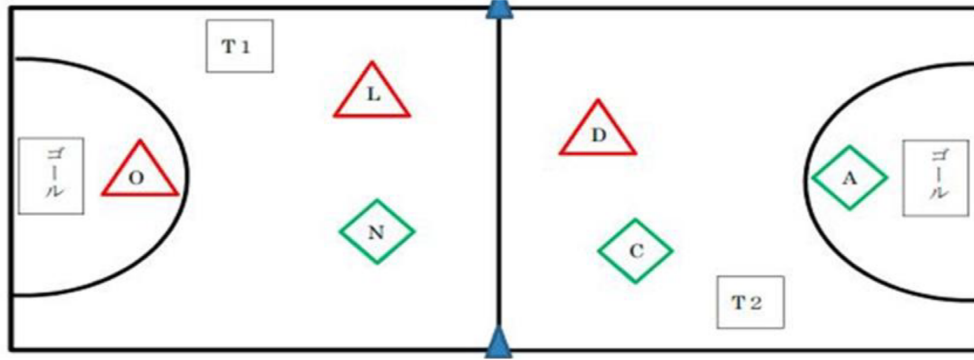


図3 場の設定 (第二次後半)



写真1 パスコースをふさぎディフェンスをする様子

ルを保持している相手につき、ゴールに向かう動きを防いだり、正面に立ってパスを出させないようにする」姿(写真1)や、ドリブルをして守備をかわそうとする姿も見られるようになった。これは、ルールや設定を全て変えるのではなく、生徒の学びや気づきの積み重ね、思考のつながりなどに配慮したこと、そして、前時までの具体的な姿を基に、改善してきたことが有効であったと考察した。

一方で、パスが全員に渡らずに得点する場面も多く見られたことから、次時に向けて、生徒がパスをつなげる必要性に気付くことができる工夫や支援が必要であると考えた。

4) 第三次 (19時～24時)

①主な活動

試合①⇒作戦タイム⇒試合②、の流れを設定した。作戦タイムでは、試合①の課題を出し合い、試合②に向けてどのように動くかやどのようにパスを出すかを決め、練習する時間を取った。

②教師が重視したこと

以下の2点であった。

- ・友だちと協力して得点をとる楽しさを味わうこと。
- ・作戦を立てる時間を設け、思考したり工夫したりしながら、ゲームを楽しむこと。

③指導上の留意点及び支援

以下の2点であった。

- ・「全員にパスが渡るとボーナス点が入る」「どのエリアに誰が入るかチームで決める」等、パスをしたり友だちと一緒に得点をしたするためのルールを工夫する。

- ・教師が各チームに1名ずつ入り、作戦や練習を支援する。

⑤生徒の変容と振り返り

当初は、第二次後半と同じように、なかなかパスが繋がらなかったり、動きが止まったりする様子も見られた。そこで、作戦タイムで教師がやりとりを仲介しながら、試合中の動きを動画なども交えて紹介するようにした。こうすることで、徐々に、想定する姿であった「友だちの立ち位置や守備との距離を考え、パスの仕方を変えたり、あらかじめ動いてパスをもらったりする」姿が見られるようになった(写真2)。

また、第二次後半と同様に得点して友だちと一緒に喜ぶ姿も見られた(写真3)。さらに、試合を繰り返していく中で、得点をより多くとるために、チームで作戦を考えながらゲームを行い、得点をするためにパスをつなぐことを目標にするなど、工夫しながらゴールを目指す姿が多く見られた。

こうした姿から、友だちと共に得点を目指すという明確な目的を定めたり、そのための工夫を伝え合う場面を設けたりしたことが有効であったと考察した。ま



写真2 守備を避けるように動く様子

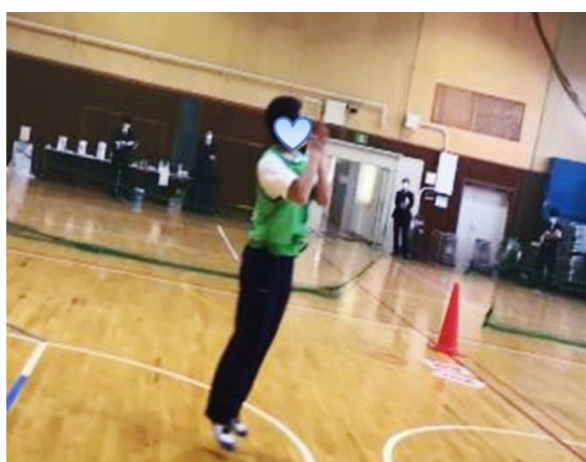


写真3 友だちが得点し喜ぶ様子

た、友だちの得点を喜んだり、そうした過程を楽しんだりできたことは、体育の見方・考え方を働かせながら活動できた姿であると見取った。

4 まとめ

本研究では、①生徒の個々の実態を捉え、「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」の3つの観点を踏まえた目標設定と評価をする。②生涯スポーツをめざした保健体育科「体育の見方・考え方」を単元の指導計画に位置付け、学習活動を設定する。の2点に着目し、授業実践及び評価を行うことを目的とした。

その結果、生徒の実態を捉え、3つの観点で目標を設定したことによって、学習活動をとおして生徒にどんなことを身に付けて欲しいか、を具体的かつ明確にしながら授業を進めることができた。また、3つの観点で授業中の姿を見取ることで、学習活動や支援の見

直し、ルールの工夫など、形式的授業評価を踏まえた授業改善ができた。

次に、体育の見方・考え方と関連させ、指導計画を立案したことで、授業の方向性が定まり、授業改善により効果的であった。特に、第三次において取り組んだ試合の中で見られた生徒の良い姿として、「友だちが得点を決めた際に、拍手をして喜ぶ姿」や「友だちのプレーに対し、『おいしい!』『ナイス』などと声を掛け合う姿」があった。こうした姿の多くは、見方・考え方として設定した「チームで得点をとる楽しさや喜びを味わいながらゲームをすること」の姿が表れたものとする。

このように、3つの観点を踏まえた目標設定と形式的授業評価の実施、体育の見方・考え方を関連させた学習活動の設定によって、本単元で想定した子どもたちの姿が随所に見られ、一定の授業成果があった、と推察できる。

さらに、単元終了後の昼休みに、友だちや教師を誘ってバスケットボールをする姿が見られている。これは、単元の中で友だちとバスケットボールを楽しんだことの結果であり、生涯スポーツ実現につながる大きな成果でもある。

今後は、今回の単元で身に付けた技能を生かしたルールや種目に取り組んだり、同じバスケットボールでもドリブルやレイアップシュートなどの段階的にステップアップした技能を身に付ける活動を想定したりする単元を構想し、実施したいと考える。本研究において着目した生徒の実態把握から始まる授業づくりを大切にすることで、体力や技能の向上を図りつつ、スポーツをする喜び、楽しさを味わい、生涯にわたってスポーツに親しむ生徒の育成に継続して取り組んでいきたい。

付記

本稿の主な執筆は橋本及び木山、授業実践は山崎、執筆指導は岡田が担当した。

参考文献

- 1) 文部科学省(2019) 特別支援学校高等部学習指導要領
- 2) 東海林沙貴・根本想(2021) 小学校の特別支援学級における体育的活動の成果に関する研究—これまでの実践のレビューを通じた検討—, 育英短期大学研究紀要第38号: 87-91

- 3) 水本勝也・村山拓 (2020) 知的障害を対象とした公立特別支援学校高等部における体育授業に関する研究—教員の意識に関する質問紙調査—, 東京学芸大学紀要総合教育科学系71: 285-294
- 4) 須田桂子・菅野和恵 (2015) 特別支援学校 (知的障害) 小学部教師の体育授業における困難さの検討—小学部教師を対象に行った調査から—, 障害科学研究39: 53-64
- 5) 福永哲也・神代博晋・毎床英樹・坂下玲子・大石康晴 (2019) 豊かなスポーツライフの実現をめざす授業の実践—バスケットボールをしよう—, 熊本大学教育実践研究(36): 253-258
- 6) 清野宏樹・越川茂樹 (2016) 知的障害特別支援学校における「運動の楽しさ」を基調とした体育授業の試み, 北海道教育大学釧路校研究紀要第48号: 81-88
- 7) 高橋憲司・清野宏樹 (2017) 小・中学校体育授業における児童・生徒の全身持久力向上に向けた提案—知的障害特別支援学校での体育授業実践から—, 地域社会デザイン研究第5号: 1-5
- 8) 松坂晃 (2017) 知的障害児の運動技能習得に関する研究—特別支援学校中学部におけるサッカー授業実践から—, 茨城大学教育実践研究36: 323-329
- 9) 小山啓太・木山慶子 (2021) 発達障害児におけるボール運動指導と社会性発達に関する一考察: 発達障害児童が在籍する通常学級と特別支援学級での6か月運動指導の実践をもとに, 群馬大学教育実践研究第38号: 183-188
- 10) 文部科学省 (2017) 特別支援学校中学部学習指導要領

(はしもと かずや・きやま けいこ・やまざき たかし・おかだ あきこ)